

兄の追憶

磯野武雄

追憶とは「昔のことや故人のことを懐かしく思い出すこと」である。私は男2人兄弟であった。私が3歳の時兄は8歳で亡くなった。

兄が8歳の時、日本は太平洋戦争中で当時私の家族は東京に住んでいた。兄の小学校では国の指示により、家族に田舎のあるものは学童疎開が奨励された。

学童疎開とは「第二次大戦末期の1944年（昭和19年）7月から、大都市の国民学校初等科児童を安全のために空襲から避けて農山村や地方都市へ集団移動させたこと」である。

私の父の実家が千葉の養老溪谷の近くにあり、父もそこで19歳まで過ごした。父の実家は父の兄が相続し、家族には私の兄と同年配の5人の兄弟がいた。

聞いた話では、私の兄が未知の田舎に喜んで行く意志を伝えたのと、父母の決断により父の実家に兄だけ

が疎開することになった。

私はまだ3歳で幼かったので東京の父母の家に残った。私はこの3歳当時のことは全く憶えていない。

従って、兄のことは少しも記憶にない。兄の写真も今では仏壇に飾ってあった木馬に乗った写真1枚しかない。その兄の顔写真は聡明で活発そうに見える。

後に親戚の叔父や叔母に聞いた話では、兄は「豆タンク」と言われるくらい活発で、近所の同学年の子供を引き連れて遊んでいたようである。

少し話が脱線するが、私の孫が丁度3歳の女の子で、なんでもすぐ覚えるし、可愛い盛りであるが、大きくなって3歳の頃のことを覚えていないと思うと、そんなものかなあと少し残念である。

そして、兄は千葉の田舎の小学校に入学し、父の実家で過ごすことになった。子供なりに田舎の生活や他の子供と早くなじもうとしたのか、東京から離れて、ましてや戦時中の食糧難の時代でもあり、辛いことも多くあったと思うが、父母には楽しい様子を伝えてき

ていたという。

数か月後、父が迎えに行き、一緒に連れて帰るつもりでいたが、兄の「折角仲良くなった友達と別れたくない。楽しいので残る。」ということで父は一人で東京に帰ってきた。

母は当然父が兄を連れて帰ってくると思っていたので驚いたが、子供の意志なので仕方がないと折れたようである。

しかし、これが兄との最後の別れになるとはその時は知る由もなかったそうである。

その日、兄は学校が終わり、いつもの遊び友達と遊んで、実家のすぐ下を流れている夷隅川に皆について行き、皆と一緒に川に入った。

夏とはいえ、川の水はかなり冷たかったそうだ。

泳げない兄は最初は川の浅瀬で遊んでいたが、友達の後を追って川の深みにも入ったようである。

兄がいらないのに気がついて、捜したが見つからず、

大人に知らせに帰って、大騒ぎになり村人が大勢で捜した後、かなり下流で遺体で見つかったそうである。

田舎の子は幼少からの遊び場所である川の遊び方を心得ていて、危険な深みや浅瀬でも滑りやすい石は避けていたそうである。兄は実家の叔父に「あぶないから川にはいかないように」と言われていたが、田舎の友達に仲良くなって欲しい一心で川について行ったようである。

母は父が兄を連れに実家に帰った時に、連れて帰っていればこんなことにならなかったと、しばらく悔やんでいた。

その思いは父も母以上にあったことでしょう。

そんなことで、兄が亡くなってから、私は「一人っ子」のように育ち、兄がいたら出来なかったような、おもちゃやお菓子や父母の愛情も独り占めし、最後には相続で父の家や財産も独り占めさせて戴いた。

私はあと数年で80歳近くなるので、兄の10倍生きたことになるが、今になって考えることは、もし兄

が生きていたら、次男坊の私は借家住まいで、なにかにつけて兄の後塵を拝していたかもしれない。

でも、もし兄がいたら悩んだ時もなにかにつけて相談相手になってくれたに違いないと思っている。

それにつけても、当時3歳の私は8歳だった兄についてなにも記憶がないのが悔しい。知っていることも皆後日周囲から聞いて記憶したことばかりである。

人生を8年間で凝縮して過ごし、いい印象だけを残してこの世を去った兄とその10倍近くを生きて、少ない能力を出し切った私は比較の仕様もないが、やはり戦争の犠牲者でもある兄は無念であったことでしょう。

私も兄弟のいる別の人生を経験して見たかったと心から思った。

2016年 6月